

言語活動を中核にした校内研究支援

平成24年度長岡市立東谷・栃尾東小学チーム

高山 朝香 (M1)

皆川 沙織 (M1)

保坂 国馨 (M1)

平野 秀穂 (M2)

松本 修 (アドバイザー)

学校支援プロジェクトの概要

長岡市立東谷小学校

校内研究主題

「子どもがめあてをもって、主体的に取り組む生活に根ざした国語学習のあり方」

支援内容

- ・ 校内研修の運営支援として、**国語科の言語活動を中核に据えた単元づくり**について提案する。
- ・ 主として、研究会を中心とした校内研究・授業の改善をサポートする。

学校支援プロジェクトの概要

長岡市立栃尾東小学校

校内研究主題

「考える力を育てる授業づくり～思考ツールの活用・
他者とのかかわりに注目して～」

支援内容

- ・一日を通じた児童の観察をもとに、担任と情報交換を行う。
- ・日常授業における学習支援を行う。

言語活動をつくる

言語活動の定義

探究的な課題のもとに、活用を図ることにより、言語的思考に関わる知識・技能および教科にかかわる知識・技能をたしかなものとする、言語による表現を伴う相互作用的な活動。

松本修(2012)

言語活動をつくる

言語活動をつくるためには・・・

- ① 学習者間のコミュニケーションをつくる。
- ② 自他を「比較」し、「異同」がわかり、「説明」できる。(メタ認知・モニタリング)
- ③ 学習者をよく見て探究的な課題を考える。

言語活動をつくる

〈国語科における言語活動〉

- ① 形式（話す・聞く・書くの知識・技能）を重視
- ② 形式だけではだめ。内容をつくる。
 - 国語科の授業の中で内容をつくる。
（例 読むこと）
 - 他教科・領域と連携する。
（例 図工・音楽）

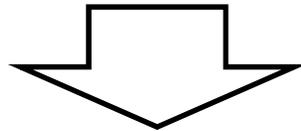
言語活動をつくる

〈問題の所在〉

小学校指導要領解説国語編で、「言語活動例」が詳細に示され、「内容」になった。

⇒ 国語科における言語活動、学習デザインの難しさから、教科書や指導書の活動例をそのまま行いがちに。

- ・学習活動に必要感をもてず、何を学んでいるかが曖昧。
- ・楽しく活動はしているが、そこでどんな知識・技能が身についたのかは不明確。



授業者の意図的な学習デザインや学校全体の共通理解・体制づくりが重要！

校内研究の運営支援

- ① 研究主任を中心とした研究推進
- ② 一人一公開の研究推進
- ③ コミュニケーションの参加者としての
授業支援

支援の流れ(公開授業まで)

①研究主任を中心とした研究推進

単元構想 (授業者 (研究主任) ・ 支援チームの協働)

← 検討

↓
「言語活動の定義」に基づく学習デザイン (授業者 ・ 研究主任 + チーム)

②一人一公開の研究推進

研究方針の共有 (全体 ・ 研究主任 + チーム)

↓
授業研究 (授業者 ・ 研究主任 + チーム)

↓
公開授業 (全体)

③コミュニケーションの参加者としての授業支援

授業研究 (授業者 ・ 研究主任 + チーム)

↓
公開授業 (全体)

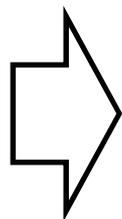
← 授業参観、個別指導、学習者の学習状況の見取り、
指示の提案、教材・指示・授業展開の検討

今後の課題

指導案を基にした検討について

= 支援チームとの指導案検討を位置づける必要性

▪ 指導案上の文言、具体的な授業者の言葉、
学習材、発問についてのより詳細な検討に繋げる
ことができる。



▪ 授業者の考える学習をより明確にし、支援の手掛
かりとすることができる。

学習デザインの実際

解決の手がかりとして・・・

松本(2012)

「言語活動を中核に据えた単元づくりの手順」



言語活動成立のポイント

設定した探究的な課題について、その課題の
解決に必要な知識・技能を学習するデザインに
なっているか。

第一単元

「東谷の生き物新聞を作ろう」

第二単元

「トキ新聞を作ろう」

第三単元

「トキ物語を作ろう」

単元名 「トキ物語を作ろう」
(第3学年《21名》全
(第三単元の目標)

トキへの思いを膨らませながら、学
方を活かしてよりよい物語を書くこ

課題解決の見通しをもた
せる過程で交流を組織し、
考えの違いを説明し合うこ
とで異同を明らかにする。

第一次 (2時間)	トキ新聞づくりを通して分かったことや、思ったことを共有し、トキの幸せを願う物語を書こうという目当てをもつ。
第二次 (10時間)	交流を通して構成、音や会話の観点から自分の作品を見直しながら物語を書く。
第三次 (1時間)	読み合い、感想を交流して作品の良さを共有し、学習館にトキ物語を届ける。

(話す・聞く・書くの知識・技能の充実)

比較教材から音や会話文、修飾語の効果を学習者が発見し、それを効果的に用いて作品を見直す様相がみられた。

学習者TH

「そしてくもの下をみると、ちょうどくもとくもの間から東京スカイツリーが見えました。

→「・・・うっすらと東京スカイツリーが見えました。」

「けしきがキレイでした。」

→「にじは、ピカピカ光っていました。」



情景がより鮮明にイメージできる書き直しを行っていることが確認できた。

(学習の成果と課題)

成果

- ・ 学習者の学習意欲を喚起することができた。
- ・ 作品から知識・技能の習得が確認できた。

その背景には

学習者の実態、指導する知識・技能を明確にし、活動を通して習得される学習過程がデザインされていた。

今後の課題

- ・ 知識・技能は、言語活動の特性上、他学級にはそのまま適用できないこと。
- ・ 観点を提示することによって学習者の作品のもつ良さがスポイルされる可能性があること。

単元名 「『東谷っ子の100冊』 (第5学年《17名》・全)

単元の目標

『東谷っ子の100冊』をたくさんの人に読んでほしいという思いを、
材文の見方や読み手を惹きつける書き方を通して、
さがよりよく伝わるガイドブックを作ることが

知識・技能(ガイドブックの書き方)の習得の学習では、交流を通して、自他を比較し、説明し合うことで異同を明らかにすることを意図した。

第一次 (4時間)	醸成活動を通して、東谷っ子の100冊に目を向け、全校のみんなにもっと読んでもらいたいというめあてをもつことができる。
第二次 (2時間)	みんなに読んでもらえるガイドブック作り学習の見通しをもつことができる。
第三次 (7時間)	ガイドブックの書き方の学習を活かして、「東谷っ子の100冊」ガイドブックを作ることができる。
第四次 (2時間)	完成したガイドブックを全校に発信する方法を考えることができる。

知識・技能の習得

交流を通して、「比較」の視点に気付いた学習者が、「おもしろさの秘密」の書き方の工夫、「おもしろさを表現するよさ」を発見した。

1BS どれどれ。

2T 例えばさっきさ(。)自分だったら(。)何だっけ、TKさん。

3TK ふつう(3)雨が降ってきた時はかさをさすけど::、学校にいたとき小雨から降ってきたらささない＝

4T ＝なるほど＝

5BS ＝自分と比べている＝

6T ＝うん、自分とそう、自分と比べて(2)どうだろう？ どうでおもしろいか。

7BS 確実に自分と比べているよね＝

8TK ＝そうだね::

9T 次、話して(.)話して。

10IK おれのこれ::おじさんは、いろいろな手段でかさをささないのがおもしろい。

11T 何と比べてる? =

12BS =誰と比べてる? =

13IK =さあ//BSちゃんは?

14BS //まあ、でも、自分だったらさ::、そんなに手段考えてさ:://、かさ守らないでしょ? =

15IK //うん。

16NT =守らされる側。

17IK うん、急ぐ時は、かさしっかり抱いて走るのは絶対に変だし::、知らない人のかさに入るのも変だし:: =

18NT =それが一番変だよ(4)

19BS で、自分と比べてるんでしょ?

20IK うん、うん、うん。

21BS やっぱり(5)おれも自分と比べてるんだけどね。

(学習の成果と課題)

成果

- ・比較という視点を取り入れた言語活動を行ったことで、「おもしろさの秘密」の書き方の工夫を知ることができた。
- ・交流場面を設定したことで、お互いの文章についてじっくり見直し、考えを整理することができた。

課題

- ・習得する知識・技能が限定されてしまう。

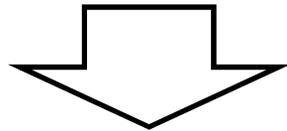
考察

成果

- ・学びの必要性を感じた学習の展開
- ・知識・技能の効果的な習得

課題

- ・より活発なコミュニケーションへの手立て

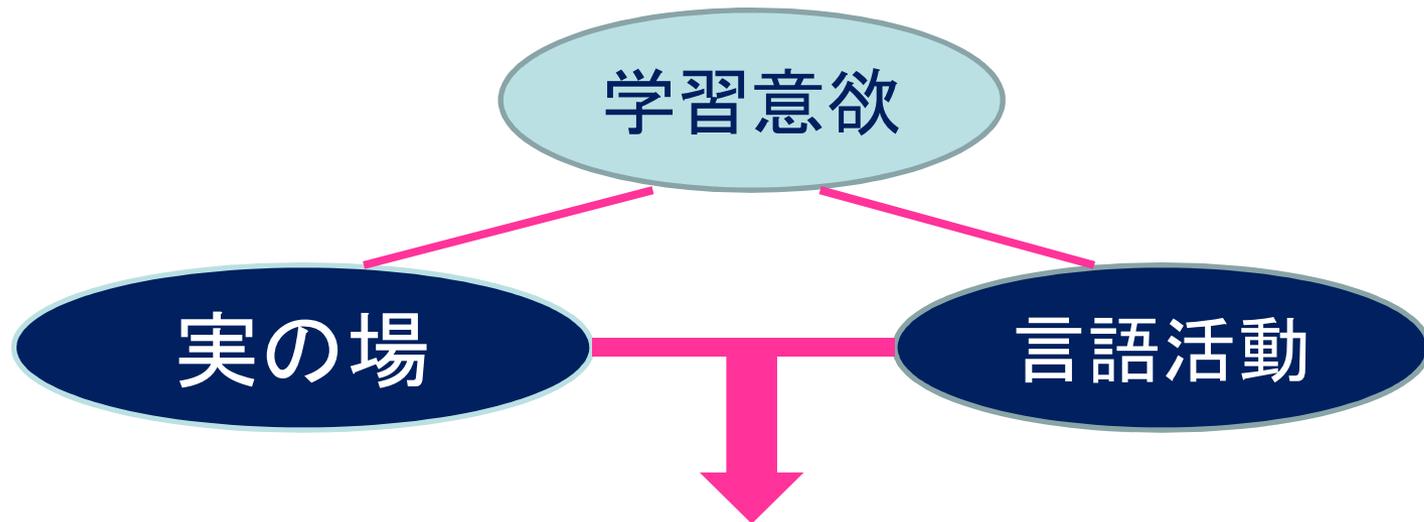


- ・学習デザインの質的な高まり
- ・コミュニケーションの在り方への論及の必要性

おわりに

「言語活動の充実」

思考力、判断力、表現力の育成



学習者が意欲的に思考、判断、表現することで課題を解決していく学習過程が重要

引用・参考文献

- 1) 松本修:「言語活動をどうとらえ、どう組織するか」,
GroupeBricolage 紀要, No30, pp.11-13, 2012.12
- 2) 文部科学省:『小学校学習指導要領解説国語編』,
東洋館出版, 2008.8
- 3) 清水登紀子ら:「言語活動の充実をめざす学校支援」,
平成23年学校支援プロジェクト報告, p.132, 2012.2
- 4) 松本修・井上幸信:「伝統的な言語文化の学習を成立させる条件」,
臨床教科教育学会誌, 第11巻, 第2号, pp.81-87,
2011.10
- 5) 松本修:『文学の読みと交流のナラトロジー』, 東洋館出版,
pp.83-84, 2006.7